

延吉からの引揚げ体験

——終戦から日本に帰国まで——

執筆：東郷量子

編集：朴敬玉

1. 終戦直後の延吉にて

(1) ソ連兵が延吉に来た

1945年8月15日、当時14歳の私は家族とともに玉音放送で戦争の終結を知りました。

その4日後の早朝、ゴーという音で眼が覚めました。ソ連軍の戦車の列が轟音を鳴り響かせながら延吉の町を北から南へと進んで来ました。その翌日から恐怖の日々が始まりました。ソ連兵が家に土足でズカズカあがり、手あたり次第、たんすや机の引き出しの中から、目ぼしい物をすべて持っていきました。時計・万年筆・カメラ・指輪・ブローチ・姉の美しい友禅染の和服など、私共が恐怖で部屋の片隅で震えている目の前で持って行きました。幸い伯父が日露戦争の時に頂いた金鵝勲章はあらかじめ倉庫のレンガの床の下に埋めておいたので見つかりませんでした。これが見つかったら大変なことになった、と皆で話し合い胸をなでおろしました。

(2) 西尾さんの会社の寮に身を寄せる

そのような日が続き個人の家にといたら危ないので興農合作社の西尾さんが「自分の会社の寮に入ったら」と勧めて下さったので、持てるだけの衣食を持って、引越しをしました。ある晩のこと、「今夜は、もう来ないでしょう」といいながら11時過ぎ、布団を敷いて寝始めたところ、廊下をコツコツとソ連兵の靴の音が聞こえて来ました。電灯を消し、乳飲み子をかかえた21歳の兄嫁と58歳の父・50歳の母だけが布団の上に座り、18歳の姉と14歳の私は布団の中にもぐっていました。ソ連兵は私共の部屋の前でピタリと止まり、ドアをあけるなり懐中電灯で部屋中を照らしながら「マダムダバイ(女の人を出しなさい)マダムダバイ」と叫びながら、一番若そうな兄嫁の腕をつかみ連れていこうとしました。その時、気丈な兄嫁は咄嗟に毛むくじらのソ連兵の腕にかみつ、父も母も兄嫁も「キャー」と大きな声を

出したので、布団の中にいた姉と私も、のどが痛くなるほどの大声で「キャー」と叫びました。

ソ連兵は、噛みつかれた痛さからか、あまりの大声にびっくりしたからなのか、血をポタポタたらしながら、部屋から出て行きました。そのような恐怖の日々が数日続いたので、私共の家族は寮から西尾宅に移りました。

(3) 男の子のように変身する

西尾さんの息子さん（当時13歳）に姉と私は、バリカンで頭を丸坊主にしていただき、乳房をさらし布でしっかり巻き、中学生が着ていたオード色の学生服を着て、すっかり男の子に変身しました。それでも、ソ連兵は外にいる若い人を見つけると、いきなり胸を触り連れて行こうとしたのを、今でも鮮明に覚えています。

また、ある時は父が「ソ連兵が、こっちに歩いて来ている。妙子と量子は、すぐ天井裏に隠れなさい」というので、すぐ天井裏に隠れ、静かにしていました。ソ連兵がやって来ました。入口にいた父に、「マダムダバイ」と言ったので、「ニエトダ（いないよ）」と言うと、家の中にズカズカ上がり、見回して、どこかに隠したのではないかと、銃剣で天井や床を何回も何回も突き刺し始めました。いくら怖くても声を出したら見つかると思い、生きた心地もせず、じっと息を殺していました。ソ連兵は、いないとわかると腹立たし気に、そばにあった七輪を持ち上げ、父の頭を思

い切り叩きました。父は5分間ぐらい気を失って倒れていました。

そのような暮らしも危険なので、日本人居留民会から「フルハト河の河南地区の人は、終戦と同時にカラになった大きな刑務所に入りなさい。その方が、高い塀に囲まれているから安全です」とのこと。河南に住む多くの家族が、刑務所生活をするようになりました。

刑務所収容所での暮らしは、ソ連兵から身を守ることは出来ましたが、水を汲むにしても、トイレに行くにしても、大変なことでした。バケツに紐をくくりつけ井戸にたらし水汲み上げなのですが、零下10度以下の延吉の冬ですから井戸の周りは、垂れた水が凍って口が狭くなっているのです。それを砕いてから始めるのです。又、井戸の周りはこぼれた水でビショビショ！それが凍って滑りやすくなり、井戸の中に落ちそうになります。命がけの水汲みです。食べ物、刑務所の入り口の両側に、朝鮮人や中国人が売りに来るので、持って来たお金で買うことが出来ました。そのような生活の中、刑務所内で虱による発疹チフスが流行し、多くの方が亡くなりました。

(4) 父の死

父が、「12月23日は多分天皇誕生日だから、お祝いに餃子を作ってください」と言いました。母は刑務所の入り口に中国人や朝鮮人が食べ物を売りに来ていたので、わずかな豚肉と小麦粉を買い、餃子を

作って父に食べさせました。父は、おいしそうに食べ、母も喜んでいましたところ、父はお経を唱え始めました。30分以上お経をあげたと思います。急に、父の読経の声がとまりました。「お父さま、お疲れになったでしょう」と、父のそばに行った時、父の呼吸はもう止まっていました。

(5) 朝鮮人・教え子たちの好意

父母が朝鮮人子弟に読み書きを教えるための「敬愛学院」という学校を河南にたて、朝鮮人の先生・生徒たちと仲良くしていたので、その教え子たちが時々私共の様子を見に来てくれていたので、父の死を伝えるとすぐ、お棺と大八車を用意してくれました。父の冷たくなった体に、父が長い間信仰していた佛教のお袈裟を左肩から右わき下にかけて、延吉神社の裏の日本人共同墓地まで大八車で運びました。土はカチンカチンに凍っているので、お棺に雪をかけ、母と2人手をあわせました。不思議なことに涙一つ出ず、ただ黙々と刑務所にもどりました。

(6) 刑務所収容所から出る

昭和21(1946)年の春ごろになると、ソ連兵も街の中からいなくなり、治安もいくらか良くなってきたので、私たちは満洲電業の社宅にいた姉(春子)、姉の夫(加藤辰雄)と子供たち(軌政、乳児)のところで一緒に暮らすことになりました。

(7) 生活費を得るための商売

生活費を得るため、ポーミーパン(とうもろこしの粉で作ったパン)を焼いて売ったり、たばこの材料(たばこの葉・葉を巻く紙・出来たたばこを入れる袋)を満人市場から仕入れ、家族みんなで「古塔」というたばこを作り、姉と2人で机の引き出しに紐をつけ、肩からつるして売り歩きました。

そのごろ、毛沢東が率いる中共軍と蔣介石が率いる国民軍との内戦があり、八路軍が延吉駅を通るとのことで、その兵士たちにたばこやポーミーパンを売るので、「ヤンジョール・ヤオ・プヤオ」(たばこはいりませんか)「ヤンジョール・ヤオ・プヤオ」と大きな声を出しながらホームから売ります。とっても良く売れて生きる喜びを感じました。

恥も外聞ありません。もと女学校の校長先生の奥様も、もと省庁の方も、みな必死で品物を売って、生活費をつくりました。また、暖かくなり雪も解けてきたので共同墓地の父のお棺を焼いてお骨にしようという話がもちあがりました。この時も、もと敬愛学院の朝鮮人の先生や生徒さんが大八車と薪など燃料を買ってきて下さったので、母と私と義兄の3人で共同墓地に行きました。12月には、カチンカチンだった土も5月には雪も解け、草が生え、冬の間になくなった方々のお棺がずらりと並んでいました。

さあ、これからが大変です。どのお棺が父のものか探さなければなりません。お

棺の上にそれぞれ名前を書いておいたのですが、半年間の間に名前は消えていました。大体覚えていた場所のお棺を開いてみましたところ、白骨化したなきがらに、あの時かけたお袈裟が胸にかけてありました。確かに父のなきがらとわかったので、薪を井桁に組み、その上にお棺をのせ、火を付けました。母と私で、お経を唱えながら燃える炎を胸が締め付けられる思いで見つめていました。こうして、父の遺骨は私たちのところに戻って来ました。

2. 延吉を出発して、日本へ

夏のはじめ、居留民会から、「日本に帰れる」という知らせがありました。

(1) 延吉を出発

昭和 21 (1946) 年 8 月 1 日、いよいよ日本へ向かって出発です。母 (上領定子) と 1 歳の子供 (正代)、姉 (妙子)、私 (量子)・結婚した姉の家族 (加藤辰雄、姉の春子) と乳児 (軌政) で、大人 6 人と乳幼児 2 人の大世帯です。ありったけの紙幣を父のお骨箱の下を二重底にして入れたり、ねんねこの襟にお札を折って縫い込んだり、いろいろ智恵をしぼって日本紙幣・軍票・満洲紙幣等を隠しました。持ち物も、大きな鍋・米・味噌・塩等々、いつ着くやらわからない旅に、いろいろ考えながら大きなリュックサックや旅行カバン・大きなふろしきに入れ、若い人が持てるだけ持って出発しました。母と姉は、正代と軌政をおんぶしました。

さあ、出発です。延吉を出てから吉林、新京 (長春)、奉天を経てコロ島にむかい、そこから船で九州に渡るのです。吉林にむかう途中、「拉法」の駅まで来ての事です。

「ここから先の鉄橋が壊されていて、これ以上汽車は走れません。みなさん降りて下さい」とのこと。私たちは、やむなく汽車から降りて、駅前の広場で茫然としていたところ、リーダーが「皆さんは、ここから歩いて老爺嶺を越えて新站まで行き、そこから吉林に向かって下さい。大きい荷物と年寄りや子供は、お金を払ってあの馬車に乗って下さい」と言うので、私たちは母と乳児の甥・姪と重い荷物数個を荷車に載せ、代金を払ってから新站へと歩き始めました。どの位歩いたでしょう、急にパンパンと銃声が響くと同時に「荷物を降ろせ」「コウリャン畑へ逃げろ」「静かに」という声！馬車を引いていた中国人は「八路軍と中国軍との戦いだ」と叫んで、どこかに走って行ってしまいました。銃声もおさまったようなので、私たち延吉からの引揚者グループは、そろそろコウリャン畑から出て、また重い荷物を背負って、あとどのくらいで新站に着くかわからない道を黙々と、老爺嶺を越え新站にむかって歩きました。私はまだ 15 歳ですから重い荷物を背負っても元気でしたが、母や姉は乳児をおんぶしての山越えですから、背中汗びっしょり、飲む水もなく大変でした。お年寄りや病人をかかえた家族の方は、本当に

その苦勞は筆舌につくせません。やっと新站着いたのは夕方でした。そこからは、材木などを運ぶ貨物車(台車)で吉林まで行くのです。くたくたに疲れた体ですが、はやく日本に帰りたい一心で、皆はその台車のまわりに大きなリュックサックなど並べ、ひもでくくり、その中に延吉から来た人たちが座って、いつ走るかわからない台車の上で寝てしまいました。どの位走ったかわかりませんでしたが、目が覚めたら夜8時頃、吉林に到着していました。

(2) 吉林收容所

吉林の收容所は石炭置き場でした。そこは、数百人の日本人が満洲各地から集まっていました。9月とは言え、夜はとても寒いのです。乳幼児には綿の入った亀の子(簡単なねんねこのようなもの)をかぶせて寝ましたが、大人たちは着の身着のまま寝ました。食べ物中国人が売りに来るコウリャンや水でお粥をたき、持って来た塩・味噌などを入れて食べました。これから先、いつ日本に着くかわからないので持って来たお金・味噌など大事に大事に使いました。半月あまりの吉林收容所生活も終わり、やっと次の目的地・新京(長春)に行かれる順番がやって来ました。新京(長春)へ向かう列車も貨物列車でした。

(3) 新京(長春)と錦州にて

新京(長春)での生活は、終戦と同時に

破壊された日本人官舎で赤レンガ造りの建物でした。窓も畳もない家でしたが、吉林の石炭置場よりましでした。食事は1日に一度。新京(長春)居留民会の日本人が、各地から来た引揚者たちに食事を出して下さいました。そのありがたかったことは、今でも忘れられません。新京(長春)に数日間滞在したあと、いよいよ奉天(瀋陽)を経て日本に帰れるのです。しかし、やっと台車(材木運搬用の台だけの貨車)に乗ったものの、数キロ走っては止まり、数キロ走っては止まるといった走り方です。こんな走り方では、いつ日本に帰りつくかわかりません。ある時、2時間以上たっても列車を出してくれないので誰となく「運転手にお金をあげれば動かしてくれるのではないか」ということになり、代表者が皆からお金・時計・指輪など集めて運転手に渡したところ、列車は南に向かって走ります。このようなことを3回ほど繰り返し、やっと錦州に着いて列車から降ろされました。

錦州の收容所は広く、コロ島行きの順番を待つ日本人でいっぱいでした。周囲は鉄条網が張り巡らされ、私たちは一歩も外に出ることが出来ません。その外側に中国人がいろいろな食べ物を売りに来ます。母と私は、そこでビーフンと野菜の炒め物を買って、皆で分け合って食べました。大ご馳走でした。そのおいしかったこと！いつもはコウリャンのおかゆでしたので。あちこちに隠し持ってきた大事なお金も日本には持って帰れないというこ

となので、ここで少しずつ使っていきました。10月の末は満洲ではもう冬です。ここでの半月余りの収容所生活の中で、日本を目前にしながら栄養失調や発疹チフスや寒さ、そして3カ月あまりの長い旅の疲れでお年寄り・乳幼児は次々と亡くなっていきました。私共は生き抜く知恵を持つ賢い母(定子)と体力のある姉の夫(辰雄さん)を中心に家族いたわりあい、励ましあいながら何とか乗り切ることが出来たことは幸いでした。

(4) コロ島で引揚げ船に乗る

いよいよコロ島に行く日が来ました。

コロ島まで、どうやって行ったか記憶にありませんが、コロ島には3日間位いたと思います。いろいろな手続きのため慌ただしく、中国人とアメリカ人が、その世話をして下さいました。日本に持ち帰れるお金は1人千円(日本円)でした。

いよいよ乗船です。乗船の前に長い行列を作ってひとりひとり頭から背中・腹・足・腰にいたるまでDDT(消毒の白い粉)を噴霧器で吹きつけられ、みんな真っ白なお化けのような姿になりました。日本に帰りたい一心で笑う人は1人もいません。船は摂津丸という赤十字の病院船を改造したものでした。船底に班ごと入れられ、コウリャンや乾パンの食事を与えられました。その乾パンは割ってみると、中に白いウジがわいているのもありましたがウジは捨てて残りを食べました。そのカンパンも1人何個と決まっているの

で捨てられません。船中でもなくなった方が数人いらっしゃいました。日本を目前にして、ご遺体は船尾から水葬されました。さぞ無念だったことと思います。

船は、緑の美しい沢山の小島の間を縫うようにして進み、やっと佐世保港が目前に見えて来ました。やっと日本に戻れたという喜びで胸が高鳴りました。ところが、その喜びは船員のメガホンの声に消えました。「この船内に流行性の患者がいるから、しばらく上陸は出来ません。それぞれもとの場所に戻りなさい」。私たちは従うよりほかありません。そこで、佐世保を目前にしながら乾パンとコウリャンを食べて上陸許可を待ちました。

(5) 日本に帰れた

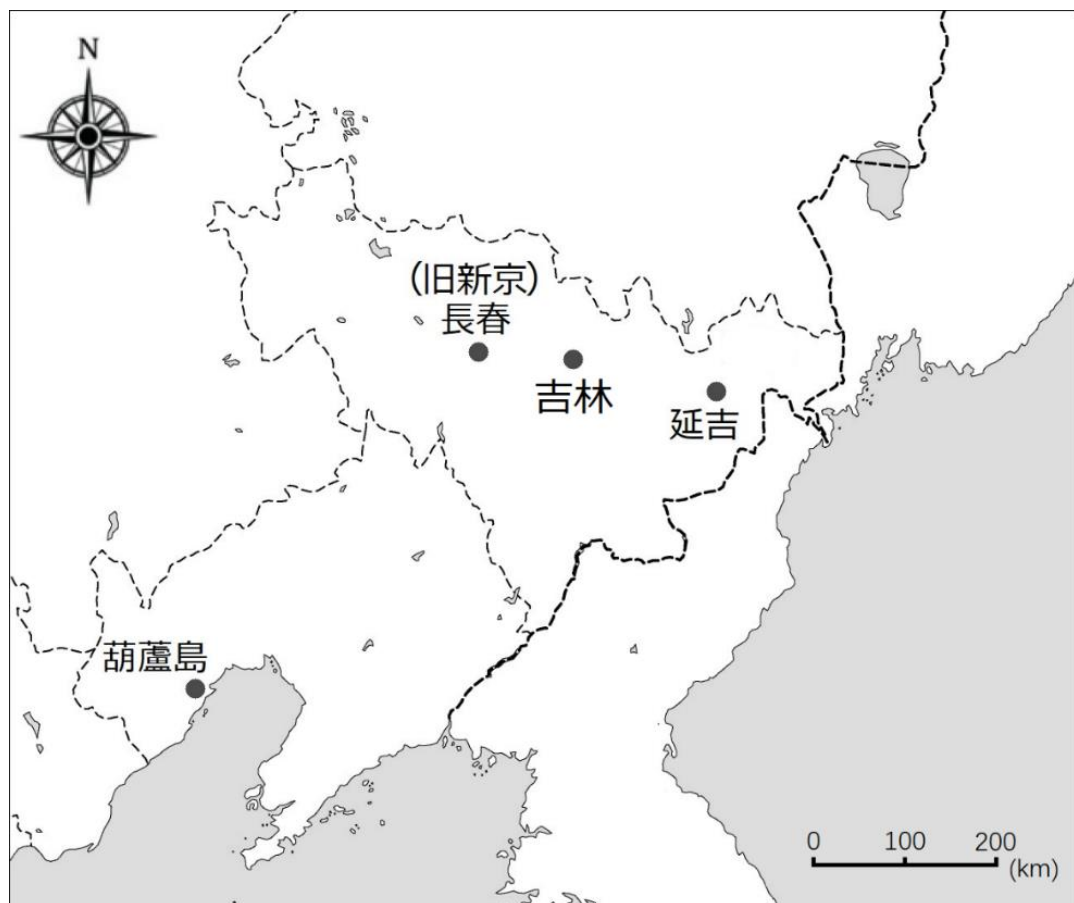
2週間目に、やっと上陸許可がおりました。佐世保に着いて一番はじめに食べたのがさつま芋入りのごはんと昆布のつくだ煮でした。私はおいしくておいしくて配られただけでは物足りない位でしたが、もともと胃が弱かった姉は食べてすぐ胃けいれんを起こして苦しみました。一晩苦しみました、痛み止めの注射をしてもらい、私たち東京組は品川にむかいました。あらかじめ、電報を打っておいたので、復員していた兄(頼正)や兄嫁(千代)の兄(繁さん)が品川駅まで梅干しの入った白米のおにぎり・とろとろ昆布で包まれた塩味のおにぎりを持って迎えに来てくれました。その頃の日本は食糧難だったので、これだけ用意するのは大変だった

たと思うのですが、そんな苦労もわからず兄たちに会えた感激と日本の味「おにぎり」を食べたおいしさ、嬉しさに涙だらけでした。感謝・感謝です。本当に日本に帰ることが出来たのだと、あらためて実感したひと時でした。

終戦（敗戦）の8月15日から、日本に帰国できた翌年の11月4日までの1年4ヶ月、恐怖・苦労の毎日でした。しかし、

それも家族一緒だったから何とか乗り切れたのだと思います。途中で力尽きて亡くなった方、やむを得ず中国人に乳児・幼児を託された方、お国のためと思って義勇隊に志願して入隊し路傍で命尽きた方々のお心は、いかばかりかと察しつつ、ペンを置きます。

2018年8月
東郷 量子



中国東北部の地図 （作成者：大野絢也）